
乙女心

鷹槻れん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

乙女心

【コード】

N2693B

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

28歳の頼子。彼女が化粧をしないにはある理由があった。

「頼子ってさ、何で化粧しないの？」

久々に女子大時代の友達と再会すると、みんな綺麗に化粧をしていた。

集まったのは特に仲のよかった悪友3人。悲しいかな、みんな揃って彼氏が居ない。

だからこそ、土曜の午後に、ファミレスなんかに来ることが出来るのだ。

でも、それと化粧をするしなは別の問題。いや、むしろ居ないからこそ綺麗に装飾するべきなのかも。

だって私達ももう28だもの。

この年になってもスツピンで勝負しようだなんて物好き、そうそう居るもんじゃない。

女の子は普通、物心がつき始めると、お洒落に気を遣うようになるのだから。

中学生だって高校生だって いや、もしかすると最近小学生だって！ 女の子はトイレに行くたびに鏡の前で髪を梳かしたりちよっぴり色つきのリップを塗ってみたり、そう言うことをするようになってるんじゃないかしら。

私だって……そんな人並みのお洒落には興味もあるし、異性から「綺麗だね、可愛いね」って思われるように努力したいとも思ってる。

ただ。

何だか表立ってそう言うことをするのが照れくさく思えてしまう。私、小さい頃からそんなところのある子だった。

人前で鏡を見るのが凄く苦手だったし、「あんたみたいな不細工な子が鏡見たって仕方ないじゃない」。いつもそんな風に言われるんじゃないかとビクビクしていた。

別に誰かに「ブス！」って言われたことがあるわけでもないのに、ただ漠然と自分はお洒落をしてはいけないんだ。そんな風に思っていた。

それは長じてからも変わらなくて。

ドリンクバーだけで何時間粘れると思う？

学生の頃のようにくだらないことを言いながら、実際にそれを注文して、五分余りが経過している。

みんな各々好きな飲み物を手に席についていた。

私の顔をしげしげと見つめて問うてくる明美に、

「何か悪いことしてるような気になるんだもん」

消え入るような声でそう言つと、明美だけでなく則子までもがぼかん……とした顔をした。

「どうして？」

二つの口から同時に発せられる至極まともな問い。

本当にどうしてだろう。自分でもハッキリとは分からないけれど

……もしかしたら。

ふと思い当たることがあって「あのね」と話し始めると、二人が目を輝かせながら近付いてきた。興味津々つて顔に貼り付けてあるの、バレバレよ？

さつき、注いできたばかりのジュースのこと忘れてしまっているみたい。

さして面白い話をするわけでなし。ふと盗み見た目の端で、存在を忘れられたグラスから一筋の水滴が流れ落ちるのが見えた。それに合わせたように氷がカラ……と軽やかな音をたてて薄まったジュースに沈む。

その音に押されるように私は話し始めた。

乙女心

「大学生の頃にね、私がすっごく好きだった人、覚えてる？」

「……確か、チャットがきっかけて仲良くなつたっていう、彼？」

その辺の事情には余り詳しくない則子が曖昧な調子でそう言う
「隆志くん！」

さすが一緒にインターネットに夢中になった仲。明美が鼻の穴を
膨らませて得意げに懐かしい名を挙げた。

悔しいけれど、今でもその名を聞いただけでちよっぴり心がとき
めいてしまう。そんな人の名を。

「そう、彼」

彼は九州の人だった。

私達の大学は本州の隅っこにあって、九州は目と鼻の先。

電車で数駅揺られれば、そこはもう福岡県。

そんな環境にいたからか、当時の私は月に二度くらいのペースで
彼と会うようになっていた。

「確か熊本の人だっけ？」

明美に負けじと則子も必死だ。記憶の糸を手繰り寄せるようにそ
う言うと、どう？ 合ってるでしょ？ そんな目で私を見つめてく
る。

「うん」

カラン……。

再び氷が音を立てたのと、私が答えたのとは殆ど同時だった。

その音に弾かれたように私はコーラをひとくち口に含む。

氷が溶けて薄まったコーラは、炭酸までもどこかに追いやられて
しまったような、そんな薄ら惚けた味がした。

そう。彼は熊本の人だった。

福岡の人じゃない。

いくら九州に近いと言っても、熊本からではそうそう何度も足を
運べる距離じゃなかったはずだ。それなのに彼はちよくちよく遊び
に来てくれた。

そんなことを思い出して懐かしくなる。

彼は気障で、見た目もちよっぴりホストっぽい人だった。

車をとつても大事にする人だった。

熊本弁訛りの独特のイントネーションで発される標準語もどきの言葉が温かくて大好きだった。

「で、その彼がどうしたの？」

幸福な数年前にタイムスリップしていた私の心は、明美の、先を急かすような声音によって連れ戻される。

「その彼とね、一度温泉に行ったことがあるの」

いつもは彼が私の住む山口まで遊びに来てくれていたけれど、一度だけ彼の住む熊本に連れて行ってもらったことがある。

お宿は彼の祖母のお家。

突然押しかけたにも関わらず、彼のおばあちゃんはとても親切に
もてなしてくれた。

「折角来たんだから色々案内してもらいなさいね」

ちらりと孫を見て笑うおばあちゃんに、私も微笑みながらうなずいた。

熊本に滞在して何日目かに、彼は阿蘇山に連れて行ってくれた。

言うまでもなく、ふもとの辺りには沢山の温泉がある。

「近くに俺のお勧めの温泉があるんだけど、行ってみる？」

彼がそう言うてくれたから。戸惑いながらもうなずいたのを覚えている。

一人で温泉に入るのなんて、初めての経験だった。

というか、未だにあれつきり経験していない。

温泉は気持ちいいけれど、一人で入るには勇気があるから。

誰も私のことなんて気にしちやいないのに、それは分かっているのに……。多分人前で鏡を見られないのと同じ理由で、二の足を踏んでしまうのだ。

大学生の頃も、私は今と同じようにスッピンで生活していた。

時折口紅を塗ってみたりはしたけれど、それ以上のことは出来なかった。

理由はやっぱり同じ。

誰かに怒られるような気がしたから。

でも、彼と居る間だけは……口紅だけは無意識の内に塗るようになっていた。

せめて彼にだけは少しでも綺麗だと思って欲しかったから。

温泉から上がると、待ち合わせのロビーに彼はまだ来ていなかった。

しばらく待っても現れない彼に、段々手持ち無沙汰になってくる。広いロビー。

周りは私とは違って、熊本弁を話す異国の人ばかり。

何だかその状況に落ち着かなくなって、私はいそいそとお手洗いに向かった。

狭い空間に入ると、少しホツとできた。

幸い私しか居ないみたい。

それを確認して鏡の前に立つと、上気した頬の自分が映っている。お風呂上りで血色の良くなっている顔を見て、私は口紅を塗っていなかったことを思い出す。

誰もいない。今の内なら大丈夫。

深呼吸をして口紅を取り出すと、私はそれをうつすら唇に引いた。口紅……といっても当時の私が使っていたのは高校生が使うような、色つきリップだった。

ほんのりと薄紅色に色づく程度のそれでは、血色が良く、赤みが強い私の唇の上では余り効果を発揮していなかっただろう。

それでも私は満足だった。

気持ちの上で「綺麗になろうと努力をしている証」が欲しかっただけだから。

それなのに。

トイレから出てくると、ロビーに彼の姿があった。

「じめんなさい」

さつき散々彼を待っていたくせに、惚れた弱みというのは怖いもの。

条件反射で謝ってしまっていた。

「いや、俺も今出たトコだからそれほど待ってないよ」

それでもやっぱり彼は優しい。

さりげなくフォローしてくれた。

それが嬉しくて思わず笑みがこぼれてしまう。

その笑顔を見て、彼がふと顔を曇らせたのが分かった。

「……？」

不安になって彼を見つめ返すと、

「口紅塗ったの？」

ビツクリした。

塗った私ですら余り目立たないって思っていたのに。

彼は気付いてくれた！

彼の表情が決して好ましいものでないことを失念してしまうくらい、それは私にとって嬉しい言葉だった。

「気付いてくれたの？」

嬉しくてそう告げたら……。

「何でそんな馬鹿なことするの？」

折角温泉で綺麗になったのに、

汚すだなんて勿体無い」

一瞬、何を言われたのか、理解できなかった。

馬鹿なこと？

汚すだなんて？

それは、私にとってお化粧がトラウマになった瞬間。

ただ、一言。

綺麗だよ」

お世辞でもいいからそう言って欲しかっただけなのに。

気が付くと、頬に一筋涙が伝っていて、慌て顔の友人二人が「気にすることないよ」とか「そんな分からず屋の言うことなんて忘れてしまえばいいのよ」とか、色々まくし立てながら慰めてくれた。

そんな友人達の様子を温かく感じながら、私は自分と同じように涙を流す、結露だらけのグラスを見つめていた。

(後書き)

最後まで読んでくださって有難うございましたm()m
救いのない話でごめんなさい(;)。

乙女心

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2693b/>

乙女心

2008年11月7日07時28分発行